

私立大学教育学部における一括募集入試入学者の 取得教員免許ごとの特徴

深谷 和義, 小杉 裕子 (椋山女学園大学)

入学定員を一括募集入試としている私立大学教育学部において、取得教員免許の違いによる成績や教員就職状況の特徴を調査する。調査対象学部においては卒業要件となっている小学校教員免許の他、希望で幼稚園、中高数学、中高音楽、また、他学部で他教科の中高教員免許が副免で取得できる。共通に履修する小学校教員免許に関わる必修科目の成績や、小学校中心の教員就職状況等で比較した。その結果、全体の履修科目数が少ない小学校教員免許のみを取得した学生は履修科目数が多い学生よりも受験時の評定値はさほど違いがないにも関わらず GPA や教員就職率が低かった。GPA は取得免許が多い学生ほど高く、教員就職率は中高数学免許取得者が高かった。

キーワード：一括入試、教育学部、教員免許、教員就職、私立大学

1 はじめに

小学校教員の免許資格を取得することができる大学は、2021年4月1日現在において国立51、公立5、私立191の計247大学ある(文部科学省, 2020)。これらの大学における学部名称は教育学部(子ども学部等を含む)が多く、そうでない学部の場合は学科名称に教育学科(子ども学科等を含む)が多くなっている。以下において、これらを総称して教育学部と記す。

ほとんどの教育学部では小学校教員免許に加えて他校種の教員免許取得ができる。国立大学では幼稚園や中高の国語、社会、数学、理科、英語、音楽等の多くの教科に加えて特別支援学校の免許も取得可能であるのに対して、私立大学や公立大学では小学校に加えて幼稚園のみであったり、中高のごく一部の教科のみが取得可能であったりする学部が多い。これは、入学定員が少ないことが主な理由だと考えられる。なお、以下においては「教員免許」を単に「免許」と記す。

国立大学の入学者選抜において、大きな単位で募集を行う一括入試が増加している(三宅, 2019)中で、国立大学教育学部では小学校免許取得を主としていても、同時に取得する中高免許に応じて、入試での入学定員を教科ごとに分けて決めていることが多い。ただし、滋賀大学や島根大学のように専攻教科をいくつかグループ分けして募集している大学もある(河合塾, 2010)。

入学定員を教科で分けて入試を実施している大学では教科ごとでの入試難易度が異なっている。一般的に、国語、数学等のように通常の一般選抜で扱われる教科と比べて、音楽や美術のような実技系教科の入試難易度は比較的低い。例えば、河合塾(2022)の2022年

度入試難易予想ランキングにおいて、小学校免許取得可能な国立大学教育学部の共通テスト得点率では、高い教科から順に英語67%、社会64%、国語・数学61%、保健体育60%、生活59%、理科55%、家庭54%、音楽53%、美術52%となっており、教科によって最大15ポイントの差が生じている。

私立大学において小学校免許を取得できる教育学部では、入学定員が少ないことから一括募集入試を行っている大学が多い。その場合、受験生の免許取得希望教科と関係なく同一の入試難易度になる。また、入学後に取得免許を決めることから、教科ごとでの人数が流動的になることが考えられる。そのような大学において、取得免許と入試区分との関係を明らかにすることや取得免許により大学での成績の傾向を分析することは、どのような選抜ができてきているかを明確にでき、入試区分ごとの定員見直し指標としての意義がある。

竹内(2019)は小学校の教員養成を目的としている私立大学の学部における教員就職希望者を対象に、教員採用試験の合格率が入試区分とは関連しないことを示している。しかし、取得免許による傾向の違いは扱っていない。

本研究では、一括募集入試を行っている私立大学教育学部において、学生の取得免許の違いによる入試区分の傾向や大学での成績・教員就職状況等の学習成果の特徴を明らかにすることを目的とする。

2 調査対象学部の状況

2.1 調査対象学部の概要

本研究における調査対象は、中規模私立女子大学A大学の教育学部である。2022年5月1日現在で、大

学の収容定員 5,464 名、教育学部の収容定員 692 名となっている。

対象学部は 2007 年度に設置され、保育士・幼稚園教員養成を主とする「保育・初等教育専修」と小中学校教員養成を主とする「初等中等教育専修」とに分かれている。専修ごとの入学定員は保育・初等教育専修 90 名、初等中等教育専修 80 名で、学部全体では 170 名である。その他に 2 年次あるいは 3 年次編入学試験等での若干名の入学定員がある¹⁾。ただし、2011 年度入学者まで初等中等教育専修は 67 名、2016 年度入学者まで保育・初等教育専修は 80 名の入学定員であった。本研究で扱う中高免許取得は初等中等教育専修のみで可能であるため、以下においては対象学部と記載した場合に、初等中等教育専修のみを扱う。

対象学部では小学校免許取得が卒業要件となっている。それ以外に、本人の希望で幼稚園免許、中学校及び高等学校の数学免許、音楽免許²⁾が取得できるプログラムを 2 年次から選べる。これらの主免に加えて、対象学部とは別の学部での教職課程科目を履修することで中高の国語、英語等を副免として取得する学生もいる。副免取得も 2 年次から開始できる。このように、すべての入学者に対して小学校の他、人数の上限を定めずに幼稚園、中高の数学あるいは音楽、更に副免での免許取得が可能となっていることが大きな特色である。一括募集入試としていることで、入試年度による難易度の変動要因を減少でき、学生は取得免許が入学後に決められるため進路選択が柔軟にできる(竹内、2017)。ただし、対象学部では、小学校免許取得が卒業要件となっていることもあり、取得免許に関わらず教員就職者はほとんどが小学校教員である。

2.2 入試区分

対象学部の入学試験には、2022 年度入試においては、入試日程の順に示すと、学校推薦型選抜として「併設校制推薦入試(20)」³⁾「指定校制推薦入試(19)」の他に、併願可の「音楽実技特別推薦入試(1)」があり、一般選抜として「一般入試 A(28)」⁴⁾「大学入学共通テスト利用入試 A(4)」⁵⁾「一般入試 B(5)」⁶⁾「大学入学共通テスト利用入試 B(2)」がある。また、受験者はほとんどいないが、その他として「社会人入学特別選抜(1)」がある。それぞれの()内には各入学試験の募集人数を記載している。なお、「併設校制推薦入試」と「指定校制推薦入試」では、調査書に記載された「全体の評定平均値」(以下、本論文においては、単に「評定値」と記したとき、特定の教科の評定平均値ではなく、すべて「全体の評

定平均値」を示すものとする。)に基準を定めたいうえで、志望理由書等の「出願書類」「調査書に基づく学力」「面接」で総合的に判断して選抜する。「音楽実技特別推薦入試」は 2015 年度入学者から「指定校制推薦入試」の募集人数を 1 名減らして実施されている。これは、「面接」に加えて、ピアノ等の「音楽実技」「小論文」を含めた推薦入試であり、音楽実技を重視した選抜である。ただし、あくまでも対象学部での入学定員の一つであり、入学後の音楽免許取得が必須ではない⁵⁾。一方、「一般入試 A」「大学入学共通テスト利用入試 A」「一般入試 B」「大学入学共通テスト利用入試 B」では、「大学独自の試験問題」または「共通テスト」を使った筆記試験による学力で選抜している。また、「社会人入学特別選抜」では「出願書類」「小論文」「面接」で総合的に選抜している。なお、試験内容の配点は入試区分や年度によって異なったり、公表していなかったりしているためここでは記載しない。

3 入試区分別・取得免許別状況

3.1 入試区分別人数

対象学部における 2020 年度末までの卒業生は 924 名である。全卒業生の入試区分ごとの人数を表 1 に示す。入試区分は 2.2 節で示した順に記載している。ただし、「一般入試 A」と「大学入学共通テスト利用入試 A」は合わせて「前期入試」,⁷⁾「一般入試 B」と「大学入学共通テスト利用入試 B」は合わせて「後期入試」とする。また、「他」の区分には 2.1 節で示した編入学試験等も含まれている。表中及び以下においては省略した名称で示している場合がある。

表 1 に示すように、「音楽実技特別推薦入試」と「他」の人数はそれ以外の入試区分と比較して非常に少ない。そのため、これらの入試区分については以下の調査結果において参考扱いとする。

表 1 入試区分ごとの卒業生数

	併設	指定	音推	前期	後期	他	全体
人数	191	211	6	405	104	7	924

3.2 取得免許別人数と平均履修科目数

全卒業生の卒業時における取得免許の種類別人数と全体に対する割合、更に免許ごとの平均履修科目数を表 2 に示す。平均履修科目数は履修した合計の科目数の他、対象学部における科目数と副免に必要な他学部での科目数もそれぞれの平均で求めている。副免

全体の科目数については副免許取得者のみに対する平均値である。なお、他学部での副免の科目においては卒業に必要な単位数の合計 126 単位には含まれない。また、副免については免許申請を卒業後に各自で行うことから、免許取得者か否かが正確にはわからない。そのため、本論文では免許状取得に必要な単位数をすべては修得していない卒業生も人数に含めることとする。

取得免許の種類は 2.1 節で述べたように複数免許取得が可能であるため、対象学部で取得可能な小学校のみ(小)、幼稚園と小学校(幼小)、小学校と中高数学(小数)、幼稚園と小学校と中高数学(幼小)、小学校と中高音楽(小音)、幼稚園と小学校と中高音楽(幼小音)の 6 通りに分けてそれぞれ記載している。更に、それらに加えて他学部での副免許取得者を同様の 6 通りに分け、全 12 通りで示している。その際、副免に関しては教科を区別していない。表 2 において、取得免許は上記における () 内のように省略して記載している。以下においても同様である。

表 2 から、卒業要件としている小学校免許取得のみの人数は 10% に満たず、90% 以上が他の免許も加えた複数免許を取得していることがわかる。多い方から幼小、小数、小音の順になっており、小学校のみ的人数はそれらよりも少ない。続いて、小副、幼小副、幼小音、幼小数の順である。他にもわずかながら、小数副、幼小数副、小音副という者もいる。幼小音副は一人もいない。

表 2 取得免許ごとの人数と平均履修科目数

取得免許	人数 (割合)	平均履修科目数		
		学部	副免	合計
小	91 (9.8%)	75.8		75.8
幼小	272 (29.4%)	70.6		70.6
小数	222 (24.0%)	81.3		81.3
幼小	17 (1.8%)	91.5		91.5
小音	135 (14.6%)	84.1		84.1
幼小	45 (4.9%)	91.7		91.7
小 副	73 (7.9%)	70.2	19.9	90.1
幼小 副	63 (6.8%)	70.8	15.3	86.0
小数副	2 (0.2%)	84.5	16.5	101.0
幼小	2 (0.2%)	92.0	11.5	103.5
小音副	2 (0.2%)	81.0	21.0	102.0
幼小	0 (0.0%)	—	—	—
全体	924 (100%)	77.1	17.7	79.9

平均履修科目数は、幼小が一番少なくなっている。対象学部の幼稚園教諭免許課程では、「教科に関する科目」が小学校と共通のため、幼稚園免許を取得しても卒業に必要な単位数に満たないことから、幼稚園免許取得によって単位を余分に取る必要はない⁶⁾。小のみの平均履修科目数は幼小よりも 5 科目程度多く履修意欲が高いといえる。一方、中高数学、音楽免許取得には卒業必要単位数よりも更に多くの単位を要する。その結果、小数は小や幼小よりも平均履修科目数が 6~11 科目程度、小音は 8~13 科目程度多くなっている。幼小と幼小音では更に多くて 91 科目以上となっている。前述のように、副免の科目においては卒業に必要な単位に含まれないことから、学部の平均履修科目数に加えて 11~21 科目程度多く履修している。

3.3 取得免許ごとの入試区分別人数の割合

取得免許の違いによる入試区分の傾向を明らかにするために、取得免許ごとの入試区分別人数の割合 (%) を帯グラフで図 1 に示す。取得免許では、一人もいない幼小音副の他、小数副、幼小数副、小音副に関しては人数がわずかなため、それぞれ主免のみである小数、幼小、小音に含めて 8 通りに分けて示している。これは、以下において同様とする。

併設校制推薦入試での入学者の割合は多い順に小音、小、幼小、少ない順に幼小、幼小音、小数であり、数学取得が少ないといえる。指定校制推薦入試では幼の取得が含まれる 4 通りがいずれも多い。一般選抜である前期入試及び後期入試では全般的に数、音、副が含まれる取得が多く、中高免許取得希望者が多いといえる。ただし、後期入試では小のみも多くなっている。

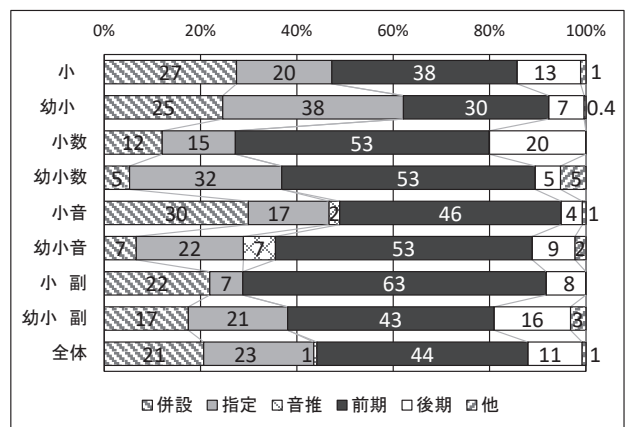


図 1 取得免許ごとの入試区分別人数の割合

4 受験時の評定値

取得免許ごとでの入学前の学力を評価するため、入試区分別で受験時評定値の特徴を明らかにする。受験時評定値を取得免許、入試区分で分けた平均値を表3に示す。取得免許ごとで全体の値と入試区分ごとで全体の値も示している。

表3より、入試区分で比較すると、どの取得免許においても全般的に学校推薦型選抜が高く一般選抜が少し低くなっている。それに対して、取得免許で比較すると、入試区分によって傾向が異なるものの全体で見るとあまり大きな違いはない。その中で、数を含む免許が少し高く、音を含む免許が少し低くなっている。つまり、一括募集入試を行っているが、1章で示した入学定員を教科で分けて入試を実施している大学同様に、音を含む入学者は若干学力が低い傾向にあるといえる。なお、入試区分別に調査書の必要教科単位で分析することは今後の課題とする。

表3 取得免許ごとでの入試区分別評定値

取得免許	併設	指定	音推	前期	後期	他	全体
小	3.88	4.19	—	3.55	3.44	3.90	3.76
幼小	3.77	3.97	—	3.79	3.54	3.40	3.83
小数	4.03	4.13	—	3.83	3.72	—	3.88
幼小數	3.80	4.20	—	3.74	4.10	3.60	3.90
小音	3.88	4.00	3.63	3.46	3.47	3.50	3.68
幼小音	4.20	3.86	4.27	3.56	3.35	3.50	3.70
小 副	4.18	4.08	—	3.59	4.03	—	3.79
幼小 副	3.84	4.02	—	3.67	3.54	4.10	3.76
全体	3.89	4.02	3.95	3.68	3.63	3.73	3.80

5 大学における GPA

5.1 入試区分別の GPA

取得免許ごとで大学における学力を評価するために入試区分別での GPA を扱う。ここでは同じ科目で比較するため、「教職に関する科目」のうち卒業要件である小学校免許のみで必修科目となっている「各教科の指導法」9科目⁷⁾での GPA を取得免許、入試区分で分けた平均値を表4に示す。なお、「教科に関する科目」は選択科目となっているため扱わない。

いくつかの先行研究にあるように学校推薦型選抜での入学者の方が全体では低い(例えば、石井, 2014; 小松, 2011)が、あまり大きな違いはない。特に、音楽実技特別推薦に関しては、まだ人数が少ないことから必ずしも低いと言い切れない。取得免許によっては

逆に学校推薦型選抜の方が高くなっている。取得免許ごとでは数を含む免許が良く、続いて副を含む免許、音を含む免許の順である。小のみは全体の履修科目数が比較的少ないにも関わらず一番低い。いずれも幼を含む免許の方が含まない免許よりも高くなっている。

以上の結果から、免許を複数取得する学生の方が履修する科目数が多くても GPA が高いといえる。4章での評定値の結果よりも大きな差が生じており、免許取得に積極的な学生は学習意欲が高く熱心に学んでいることが考えられる。

表4 取得免許ごとでの入試区分別 GPA

取得免許	併設	指定	音推	前期	後期	他	全体
小	2.44	2.52	—	2.44	2.17	2.56	2.42
幼小	2.63	2.53	—	2.70	2.70	2.89	2.62
小数	2.73	2.59	—	2.71	2.74	—	2.70
幼小數	3.00	2.56	—	2.90	3.33	2.56	2.80
小音	2.63	2.77	2.59	2.63	2.61	2.56	2.65
幼小音	2.70	2.66	2.33	2.80	2.44	2.56	2.69
小 副	2.69	2.64	—	2.64	2.72	—	2.66
幼小 副	2.75	2.59	—	2.82	2.86	2.78	2.77
全体	2.64	2.58	2.46	2.68	2.66	2.67	2.64

5.2 科目別の GPA

大学での学力の詳細を評価するために、取得免許ごとでの科目別で各取得免許に該当する学生の GPA の平均値を棒グラフで図2、図3に示す。図2は小学校免許に関わる成績を比較するために、前節と同様に「各教科の指導法」9科目の個々の GPA である。9科目の平均値を「9科目平均」として折れ線グラフで示している。また、図3は広く免許に関わる成績を比較するために、小学校に加えて小学校を除く何らかの免許取得においても必修科目となっている11科目を扱う。なお、「事前及び事後指導」は、教育実習の一部として本学部教員が担当している科目である。

GPA は科目によって平均値が大きく異なる場合がある。そのため、図2、図3においては、各取得免許での傾向をみやすくするため、科目ごとに、それぞれの科目で一番低い GPA の取得免許での値を「最低 GPA」とし、最低 GPA に対する差分で示している。

図2において、「図画工作の指導法」を除いた8科目で小のみが一番低い。幼小數、小数は「算数の指導法」が飛びぬけて高いだけでなく、全般的に高い値となっている。ただし、幼小數は「図画工作の指導法」

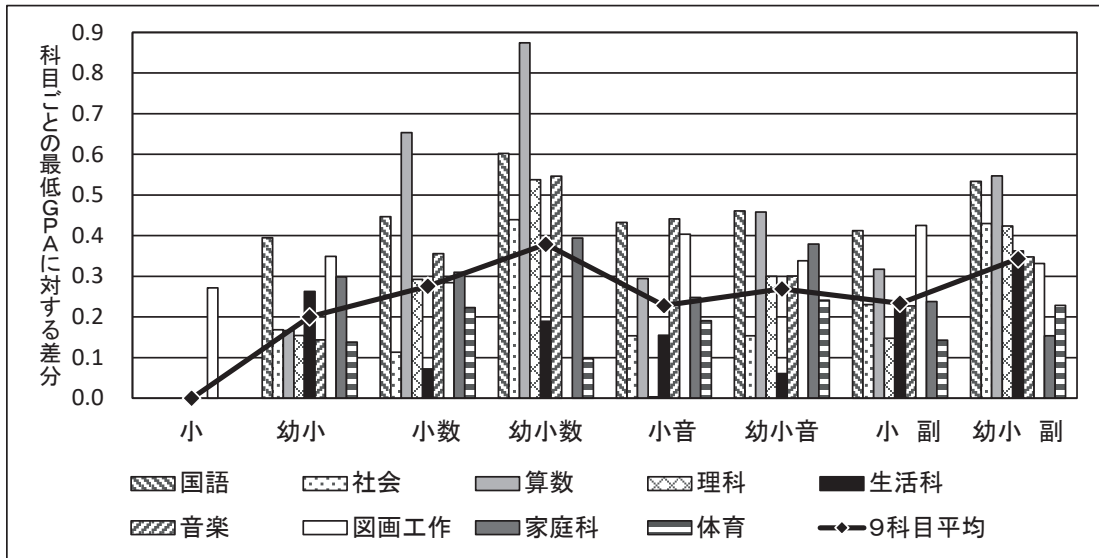


図 2 「各教科の指導法」における GPA

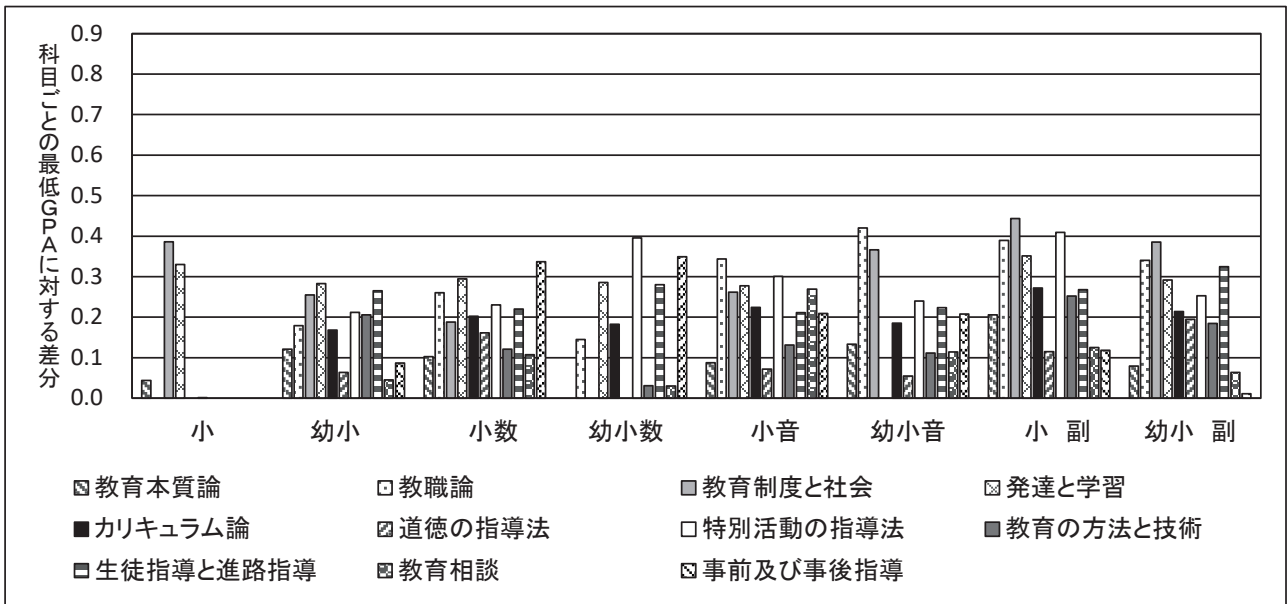


図 3 教員免許取得に必要な必修科目（「各教科の指導法」を除く）における GPA

が一番低く、「生活科の指導法」「体育の指導法」も高くない。「音楽の指導法」は中高音楽免許を取得している小音が 2 番目に高く、幼小音は 5 番目に高い。

図 3 の科目においては、全般的に「各教科の指導法」の科目ほど大きな違いがみられない。その中でも、多くの科目で小のみの学生が低いが、「教育制度と社会」「発達と学習」は高い方となっている。他の科目では、「教育本質論」「教育制度と社会」「道徳の指導法」で幼小教が一番低いなど「各教科の指導法」とは異なる傾向になっている。幼小教は、「各教科の指導法」では比較的高かったが、図 3 の科目では他の複数免許

取得に比べて特には高くない。

以上の結果から、数学免許取得者は「算数の指導法」の学力が高いだけでなく、全般的に「各教科の指導法」での学力が高いが、音楽免許取得者は「音楽の指導法」での学力が必ずしも高くない。また、5.1 節で述べた「幼を含む免許の方が含まない免許よりも GPA が高くなっている」ことがほとんどの「各教科の指導法」の科目においていえる。

図 2 の「各教科の指導法」においては、教科内容に関わらず、指導の原理や方法を踏まえ授業を構築する点が共通しているのに対し、図 3 における科目は歴

史・思想・制度など科目にそれぞれ固有の分野を学ぶ内容である。そのため、特定の取得免許において共通に学力が高いというような傾向はみられず、科目によって学力の傾向が異なると考えられる。

6 進路状況

取得免許の違いによる卒業時の進路状況を、教員就職を中心明らかにする。取得免許ごとに人数の割合(%)を進路別の帯グラフで図4に示す。教員就職は教諭採用の公立正規、講師採用の公立期限付、私立教員に分け、教員以外では公務員、一般企業、大学院等への進学、不明や就業しない者を他として分けている。なお、教員就職は2.1節で述べたようにほとんどが小学校教員であり、他に中学校教員が毎年2名程度、幼稚園教員が若干名いるだけなので学校種を区別していない。

図4より、公立正規採用は、半数以上である小副を筆頭とし、続いて小数、幼小小、小音、幼小副、幼小、幼小音、小のみの順である。ここでもGPAが低い小のみの履修単位数が少なくても関わらず一番低い結果となっている。筆者らは音楽免許取得者でのGPAが高いほど公立正規の採用が多いことを明らかにした(深谷・小杉, 2022)が、異なる取得免許者においてもGPAが高い方が傾向として公立正規教員で採用されているといえる。公立期限付、私立教員を加えた教員就職全体では、高い方から小数、幼小小、小副、小音、幼小音、幼小副、幼小、小のみの順である。数学免許取得者に教員就職者が多いといえる。

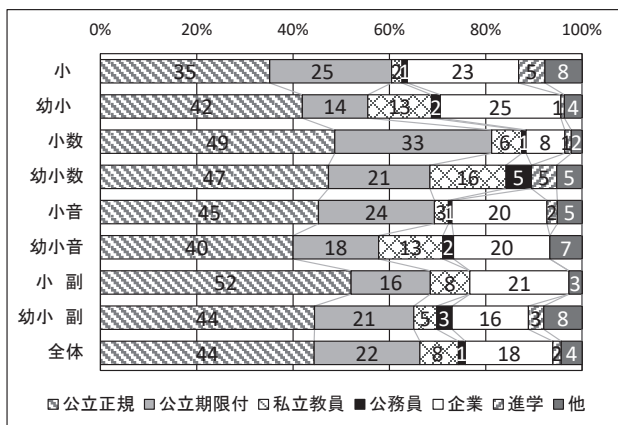


図4 取得免許ごとの進路状況の割合

7 まとめ

入学定員を一括で募集する入試を行っている私立大学教育学部における取得免許の違いによる特徴を、人数、学力、教員就職状況等で調査・分析した。その

結果、主に次のことがわかった。

- 取得免許によって平均履修科目数が約70から100以上まで大きく異なっていた。特に、卒業単位とは別で科目を履修する副免許取得の場合は履修科目数が多くなっている。
- 学校推薦型選抜での入学者は小学校に加えて幼稚園や音楽免許取得者が多く、一般選抜での入学者は数学、音楽、副免許を含む免許取得者が多かった。
- 受験時の評定値では、取得免許での違いはあまり大きくなかった。
- 小学校免許の必修科目のGPAで比較すると、「各教科の指導法」では、履修科目数が多いにも関わらず、複数免許取得者の方が高かった。他の科目では科目内容によって取得免許による傾向は異なっていた。
- 教員就職の割合は数学免許取得者が高く、小学校のみの免許取得者が低かった。

今回は全員履修する科目のみで比較したが、各免許取得に関わる科目も含めた特徴分析が今後の課題である。

注

- 1) 初等中等教育専修では、2年次編入学定員2名と3年次編入学定員3名とがある。また、定員以外に他学部からの転学部、保育・初等教育専修からの転専修で入ってくる学生もいる。
- 2) 中学校と高等学校の免許取得には若干の必修科目・単位数の違いがあるため、必ずしも全員が中高両方の免許取得をするわけではない。しかしながら、ごく一部の学生を除いて中高同時に取得しているため、本論文においては一括して扱っている。
- 3) 併設校制推薦入試は調査対象大学の併設高等学校からの推薦枠による入試である。
- 4) 2020年度入試までは「センター利用入試A」として実施していたが、2021年度入試からは「大学入学共通テスト利用入試A」としたような名称の変更や、入試区分ごとに募集人数の若干の変更がこれまでに何度か行われている。
- 5) 実際には、これまでに音楽実技特別推薦で入学した学生は全員入学時点で音楽コースを希望している。
- 6) 2017年の教育職員免許法施行規則改正により「教科に関する科目」が「領域および保育内容の指導法に関する科目」となったため、2019年度入学生からは幼稚園免許に必要な単位数が増加しているが、本論文での対象者ではない。
- 7) 2017年の教育職員免許法施行規則改正により2019年度入学生からは「教科及び教科の指導法に関する科目」の中の「各教科の指導法」となった。また、外国語(英語)の指導法が加わったが、本論文での対象者ではない。

参考文献

- 深谷和義・小杉裕子 (2022). 「小学校教員養成課程を主体とする私立大学教育学部における音楽免許取得者の特徴」『大学入試研究ジャーナル』 **32**, 173-179.
- 石井秀宗 (2014). 「推薦及び一般入試の受験者層の推移に関する検討」『大学入試研究ジャーナル』 **24**, 35-40.
- 河合塾 (2010). 「大学入試の大括り化の進展とその影響」『Guideline』 2010年7・8月号, 2-15.
- 河合塾 (2022). 「入試難易予想ランキング表」 河合塾
<https://www.keinet.ne.jp/university/ranking/> (2022年3月1日).
- 小松俊朗 (2011). 「入試・コースと学内成績の関連に見る教育学科の動向」『教育諸学研究』神戸女子大学文学部教育学科, **25**, 67-83.
- 三宅貴也 (2019). 「国立大学入学者選抜における括り入試の状況と評価について—ケーススタディとしての高校調査を踏まえて—」『大学入試研究ジャーナル』 **29**, 251-256.
- 文部科学省 (2020). 「小学校教員の免許資格を取得することのできる大学」 文部科学省
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoin/daigaku/detail/1287044.htm (2022年3月1日).
- 竹内聖彦 (2019). 「私立大学教員養成学部における入試区分と卒業後の進路との関連」『大学入試研究ジャーナル』 **29**, 23-28.
- 竹内正興 (2017). 「括り入試が高校現場に与える影響—A県の高校教員、大学教員、大学生に対する調査結果からの考察—」『大学入試研究ジャーナル』 **27**, 79-84.